

事務局たより

第25号 2018年7月1日 chyda-kr@f8.dion.ne.jp

◇事務局 101-0061 千代田区神田三崎町 2-19-8 杉山ビル 2F
千代田区労協気付 T:03-3264-2905 F:03-6272-5263

安倍 9 条 改 憲 N O !
森友・加計疑惑徹底追及!
安倍 内 閣 退 陣 !
6・19 国会議員会館前行動

19
日行動



2015年9月19日に強行成立させられた「戦争法」を忘れず葬り去ろうと継続している「19日行動」。この日は33回目。2200人が結集した。

「二度と過去を未来にしないこと」

摩文仁の丘。

眼下に広がる穏やかな海。
悲しくて、忘れることのでき
ない、この島の全て。

私は手を強く握り、誓う。
奪われた命に想いを馳せて、
心から、誓う。

私が生きている限り、
こんなにもたくさんの命を犠
牲にした戦争を、絶対に許さないことを。

もう二度と過去を未来にしないこと。

全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教を越え、
あらゆる利害を越えて、平和である世界を目指すこと。

生きる事、命を大切にできることを、
誰からも侵されない世界を創ること。

平和を創造する努力を、厭わないことを。



6月23日、沖縄慰霊の日。浦添市立港川中学校3年・
相良倫子さんが朗読した詩「生きる」の一節です。

今、過去に目をつぶるところが、なかったことにし
ようとする政治、いや人間が「生きる」ことそのもの
を否定する政治がまかり通っています。

特定秘密保護法、戦争法、共謀罪法。そして6月29
日、与党は、娘を家族を過労死で奪われた遺族が、参
議院傍聴席で遺影を掲げて抗議する中で、「働き方改悪
法」成立を強行しました。安倍内閣の暴走は、労働者
を過労死に追い込む法律までごり押ししたのです。

「二度と過去を未来にしないこと」と訴えた中学生・
相良さん、病いと闘いでやつれた身体をさらして、
辺野古基地建設断固阻止と訴えた翁長雄志知事。その
“沖縄の叫び”を眼前にして平然している安倍首相。

暑い夏になりますが、「負けてたまるか！」です。国
家権力犯罪を糺す闘いをさらに継続し、安倍暴走政権
打倒の戦列に立ち続けましょう。 (福島 清)

*

「対米従属」は国家破綻への道

『国体論—菊と星条旗』 著者・白井聡インタビュー（2018.6.26、27 ニュースウィークから抜粋）

アメリカと米同盟諸国との対立が目立ってきている。6月のG7ではその対立が際立っていた。一方、日本は、6月12日の米朝首脳会談で非核化費用の負担ばかり求められ、北朝鮮をめぐる外交において「蚊帳の外」かと騒がれた。そんななか、『国体論—菊と星条旗』（集英社新書）が注目を集めている。1945年の敗戦の境に、天皇（菊）を頂点とする日本の統治体制であった「国体」が、アメリカ（星条旗）への従属にとって代わられた、と歴史的に分析。この特殊な従属体制から脱却しなければ、日本は敗戦に続く二度目の破綻に向かうと警告する。

——ドナルド・トランプ大統領は従来の米政権とは異質だ。その点で、戦後史の考察から日米関係を論じた本書の視点は通用しにくいのではないか。

いや、米大統領が誰になろうとも、日本の側は何にも変わらないということが、この間証明された。大統領がどんな人であろうが、何を言おうが、安倍晋三は迎合するだけだ。しかも、必死に媚びを売る安倍の姿が日本国民を憤激させることもない。むしろ、「よくやっている」などと喧伝されている。だから、『国体論』に書いたことは、より一層明白になったと言える。つまり、トランプ政権の登場によって「戦後の国体」の矛盾は、いよいよ隠せなくなってきた。「戦後の国体」の頂点たるアメリカに、恭順し、媚を売れば売るほど、日本が収奪の対象とみなされていく構図がはっきりしたからだ。

トランプの言動には、「われわれアメリカは公明正大なのに、その善意に同盟諸国は付け込んでいる」といった被害者意識が感じられる。日本のような、アメリカ頼みの同盟国の付け込みを止めさせれば、「アメリカを再び偉大に」できるというわけなのだろう。

「アメリカを再び偉大に」という、このスローガンの元祖はベトナム戦争後の暗い世相を打ち破ったレーガン大統領だと思う。レーガノミクスは製造業復活を唱えながらドル安誘導をせず、「強いドル」を支持。ブドゥー（いんちき）経済と呼ばれるほど矛盾だらけだったのに、レーガンの颯爽とした姿に米国民は「偉大なアメリカの復活」を見て熱狂した。

その後の大統領も皆、「偉大なアメリカ」を演出しようとした。次のジョージ・ブッシュは宿敵ソ連を崩壊に追い込み、湾岸戦争で「世界の警察官」になったが経済運営に失敗。ビル・クリントンは製造業復活を目論見ながらも、レーガン同様の金融資本主義化でし



のいだ。ブッシュ・ジュニアはネオコンのイデオロギーに基づいて対テロ戦争にのめり込む一方、金融資本主義化のツケがリーマンショックによって爆発的に露呈してきた。

ここでいよいよ行き詰まりが酷くなり、バラク・オバマが登場した。オバマはインテリで弁舌さわやかな黒人大統領。人種融和という「アメリ

カの夢」を象徴する存在だった。彼の姿に世界中が「偉大なアメリカの復活」を期待した。しかしながら、何もできなかった。格差は広がり、荒廃している。つまり、歴代大統領が皆「偉大なアメリカ」を演じながら、繰り返し失敗してきたということだ。

そこで、「偉大なアメリカ」をスローガンとして直接打ち出すことで政権を取ったのがトランプだ。アメリカが衰退局面にあるなか、他国よりも自国中心に、という姿勢で、日本に厳しくあたる。

日本では、特にリベラル派に「トランプ当選にがっかりした」との論調がある。だがアメリカはずっと「アメリカ・ファースト」だったし、「偉大なアメリカの復活」というプロジェクトを繰り返してきただけだ。日本がそんな物語を共有する必要はない。米大統領は偉大でなければ、と期待することこそ、日本が「魂の従属」下にある証拠だ。

——米軍基地問題に関して、トランプの撤退論に期待する声もあった。

対米従属を自己目的化した支配体制を取り除かない限り、日本にはそれをチャンスにできる主体性がない。政官財学メディア全てに言えるが、その主流派は従来の対米従属システムを維持することで自分の権益を守るのが行動原理になっている。「原子カムラ」という言葉があるが、「安保ムラ」はもっと巨大で、政官財学メディアの主要部分全体が安保ムラだと言えるくらいだ。

「アメリカの一の子分」として戦後復興に邁進した時代には、その問題性が表面化しにくかったし、単なる子分でよいというメンタリティーもなかったはずだ。むしろ復興を支えた日本のエートス（社会規範）は、アメリカに従属しながらも「（経済戦争で）今度こそアメリカに勝つ」という、戦前の教育を受けたリーダ

一層の複雑な感情にあったと思う。アメリカに反発しながらも、自国の繁栄がアメリカのパワーによって保障されているという矛盾や葛藤がそこにはあった。ところが世代交代でそうしたエートスが失われ、親米スタンスは、日本の支配層の階段を上る単なるパスポートのようなものになった。そして、復興の成功体験があまりに強烈で、何のための従属が分からなくなってしまう。だから、無条件に従属のための従属をしている。そこには以前のような葛藤がない。葛藤のない人間は成熟せず、幼児化する。

冷戦以降、アメリカが日本を保護する理由がなくなる一方、東アジアは激動の時代に入った。中国の国力の大幅な増進が第一のファクターだが、それに加えて朝鮮戦争の終結が視野に入ってきた。東アジアにおける冷戦構造の残滓の一大要因がなくなる。これが実現すれば、在韓米軍は不要となり、今度は在日米軍の問題に議論は移行するだろう。一方で中国共産党政権は、台湾を版図に治めないと国家が完成しないという神話を持ち、それを長年国民にプロパガンダしてきた。台湾問題は朝鮮半島問題よりも難しい課題だ。

——まずは対米従属を脱してから合理的に日中同盟や日ロ同盟の可能性を。

あらゆる可能性を吟味したうえで日米同盟が最も合理的な選択肢として選ばれるのならば、それは理解できる。しかし、現実はそのようではない。弁護士・猿田佐世氏が「ワシントン拡声器」という概念によって明らかにしていることだが、日本の政官メディアがやっていることは、言うなれば「アメリカの神社化」だ。

対米従属エリートたちは、渡米してアメリカの政財界やシンクタンクなどに、日本国民の血税を原資とする「費銭」をばらまいて拝む。そうすると、「神のお告げ」、つまり日本の親米派に都合のいいことが書かれたレポートが出て来るので、日本に持ち帰って、「神様はこう言っておられる！」と言って触れ回る。公金を何億円も使って命令してもらっているのだ。

——対米従属からの自立はこれまでも反米保守派からも唱えられてきた。

石原慎太郎なんかが典型だが、威勢のいい発言は全て日本国内向けで、ワシントンに行けば対中脅威論をあおって、日米同盟を称賛する。かつて占領憲法はけしからんといいいながら、政権を握ったら「ロン・ヤス」「不沈空母」と言いだした中曽根康弘首相も同じだ。当世流行のネトウヨの諸君もそうだが、戦後日本では、「愛国的」「右翼的」であればあるほど対米従属的であるというのが常識となっている。だから、この国の

右側にはナショナリズムなど存在しない。愛国ごっこに姿を借りた奴隷根性があるだけだ。

冷戦構造が厳しかった時代でさえ、アジアの親米国家の指導者でアメリカと軋轢を生じさせて暗殺された人物は、その疑惑を含め複数いる。日本の親米保守派は面従腹背を気取ってきたかもしれないが、誰も暗殺されたことがない。

あらためて2010年に沖縄米軍基地問題のために退陣した鳩山政権の挫折の異様さを肝に銘じるべきだ。普天間基地の沖縄県外移転という方針に、アメリカが直接怒ったのではなく、「アメリカの言いそうなこと」を日本のメディアや官僚、民主党政権の閣僚までが先回りして騒いで倒閣した。アメリカに対していささかなりとも主体性を見せることが、「反国体」的なのだ。

——日本の野党はどうか。

民進党の解体は見苦しかった。自民党と根本的に対決しようとするのなら、真の争点になるのは「対米自立」のはずだ。彼らが日本共産党との共闘から逃げ出した、あるいは及び腰である理由は、煎じ詰めればこの問題なのだ。共産党こそ、対米自立を一貫して唱えてきた勢力だからだ。だから、共産党と本格的に連携するとこの課題に取り組みざるを得なくなるのであり、それが怖いから、クラゲのように浮遊する国民民主党が生まれた。

立憲民主党はといえば、腹を決めるしかないのに、選挙では共産党の候補に推薦を出そうとしない。対米自立という野党共闘の真の意味を理解しているのは、共産党の志位和夫委員長と自由党の小沢一郎共同代表だけだ。

——結局、日本は対米従属を脱せるのか。それとも破綻に向かうのか。

破綻はこれから起こるのではなく、すでに起こっている。安倍政権が腐敗と失政にもかかわらず長期本格化している、つまりこんな政権が相対的にであれ国民から支持されているという事実は、まさにこの国の破綻を物語っている。国民、とりわけエリート層の立て直しにしか、本当の解決はないだろう。日本の対米従属はきわめて異様であるという認識が広がることが大事だ。

皆、対米従属を批判したらおこぼれにあずかれないと恐れているのかもしれない。けれども、『国体論』は売れており、印税も入って来る(笑)。私は「そんなことを言ったら干されるぞ」と言われそうなことを遠慮なく発言してきたが、それでも食っていけることを証明している。

勝訴の旗を高く掲げるために！

4年になる裁判支援に感謝します

韓国カトリック大学客員教授・植村 隆

「真相を広める会」のみなさん、いつも私のことを、注目してくださり、感謝しております。また裁判支援もありがとうございます。

東京訴訟で、傍聴席の方をみると、いつも「真相を広める会」はじめ「新聞OB」の仲間の皆さんの顔があり、そのたびに勇気をいただいています。

韓国での大学の授業、日本での裁判や様々な講演会など日韓を行ったりきたりして、いつもばたばたしており、なかなか皆様に、ご挨拶できなくていつも申し訳なく思っています。

植村バッシングが激烈を極めていた 2014 年からもう 4 年になります。2015 年に私の記事を「捏造」と言いふらしている西岡力氏と櫻井よしこ氏をそれぞれ名誉毀損で東京地裁と札幌地裁に訴えました。

最初は大変厳しく、つらい日々が続きました。しかし、みなさまの応援のおかげで、いまは勝利に向けて、徐々に前進しているのを実感しています。

最近では、櫻井よしこ氏が、その記事の中の間違いを認め、産経新聞や月刊 Will に書いた自分の文章を相次いで訂正しました。私の記事を「捏造」としてきた根拠が大きく崩れています。

札幌地裁は、7月6日に結審し、秋にも判決の見通しとなりました。東京地裁では9月5日に私と西岡氏の本人尋問があります。

いよいよ植村裁判も大詰め新时期に来ています。

勝訴の旗を裁判所前に掲げるべく、頑張りたいと思います。みなさま、ぜひさらなる支援をお願いします。

異常はここまで…「9」はダメだと！

京都の紫野明日香さんという方が、ツイッターで写真をつけて次のように書いています。



先日国会傍聴に行ったら、「9がついている物はダメです」と係員に止められました。ネックレスもタグも9は外せと言われます。結局カーディガンで隠して入るよう言われました。「NO WAR」もダメなんだって。9はダメで他の数字はOKなんだって。変だよ。

*

これを見た東海林智・毎日新聞新潟支局長がフェイ

<コラム> 冤罪忘れるな！②⑤

軍機保護法の拡大強化

陸軍書記官・日高巳雄

1899年制定の軍機保護法を戦争推進法に抜本改定するにあたって、法案作成の中核に参画した。公刊された著作に『軍機保護法』（1937年・羽田書店）および『軍機保護法 改訂』（1942年・同）があり、それぞれ逐条解説がなされて詳しい。個人の著作の形ながら、陸軍大臣の序文があり、事実上、軍の公式見解（解釈）となって、運用にあたっては重きをなした。



日高の肩書は陸軍書記官とあるだけで、著作にも著者紹介がなく、経歴も知れないが、発行人である羽田武嗣郎の書いた「後記」（初版）では「本法令立案者たる日高」と紹介されている。「後記」では議会審議での論点整理も織り込まれ、付帯決議の全文も記載、発刊の意図に触れて「謬って法を殺して使ふが如き事の無い様」と釘を差してもいる。だが、なぜか改訂版ではこの「後記」も大臣の序文も外されている。

◆ ◆ ◆

「スパイ冤罪事件」の真相に迫る決定版（本会編）『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』花伝社刊

第1部＝冤罪の真相、第2部＝冤罪事実の条条検証 資料編＝判決全文、軍機保護法全文、年表 特別添付＝重要事項索引（別冊）

申し込みはFAX・メールで本会事務局まで（1面上部題字横に掲載）。送料税込み2300円。後払い。

スブックで以下のように書いています。

【これはやばいだろう…】この方は存じ上げないが、これは相当ヤバイ話だなぁ。“安倍殺す”とかじゃないんだよ、9という数字なんだよ。それがダメなんだって。もう、この国はファシズムの国になってしまっているんだね。そのうち、日の丸のデザインが入っている服を着ないと傍聴できませんとかにすんだろね。取材メモの表紙に9の数字を書いたの持っていたら退出させられるのか。非暴力・不服従で闘うまでだ。